

Y03a 1956年の滋賀オーロラ目撃報道と山本一清の対応

玉澤春史，河村聡人，磯部洋明（京都大学）

山本一清（1889-1959）は京都大学の花山天文台長をつとめたあと私設天文台として山本天文台を開設，またアマチュア天文家の育成をしており，現在で言うところの科学コミュニケーションに積極的な先駆者であるともいえる．また，当時滋賀県出身の天文学者として知られていたため，山本の元には新聞社や市民からの問い合わせがあったようである．1956年に山本が観測中に何らかの発光現象を目撃，山本はオーロラの専門家ではなかったものの，滋賀でオーロラが見えたとの発表，新聞に報道された．当時の地磁気指標などと比較してみるとオーロラであったと考えるのは難しいのだが，報道を受けて山本の元には市民からの問い合わせが来て対応している．一部報道では地球物理学の専門家からのコメントもを引用してオーロラかどうか疑わしいとも報道している一方，山本の発表に基づいて報道しているところもある．

山本天文台に残された資料（花山天文台に移管）にはこのオーロラ報道に関する記録や市民からの問い合わせ記録が残っており，当時の様子が伺える．必ずしもオーロラの専門家ではない山本が対応した当時の姿は，専門領域以外への研究者の対応，およびそれに対する報道や市民の反応という点で現代にも通じる事象である．